
魔法少女リリカルなのは～闇を統べし者～

ノワール

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

魔法少女リリカルなのは 闇を統べし者

【Nコード】

N5046M

【作者名】

ノワール

【あらすじ】

俺は壊す。

このセカイを全て。

見てしまった、知ってしまった。

だから、俺は

プロローグ（前書き）

はじめまして、ノワールです。

この作品は処女作なので意見感想などを聞きながらゆっくりとやっていきたいです。

いろいろとよろしく願います。

ポツリと少年が呟いた。その声に男性は嬉しそうに答える。

「ん？ どうした？」

やめろ。答えるな。

そんな男性を見て少年は激昂する。

「なんでこんな酷い事してんだよ！」

それを聞いたら、もう戻れなくなるぞ。

そして、男性は答えた。答えてしまった。

「なぜって、これは世界のために必要だからに決まっているだろう」

そう当たり前のように答える男性を見て、少年の中で何かがコワれるオトがした。

「こんなことが世界のためっていうのなら、この俺が

こんな世界をぶち壊してやるよ！

」！

男性を殺した後、そう少年は腐りきった世界に宣言した。

今思えば3年前のこの日から始まったんだった。

平凡な日常を歩く俺が死に、セカイを壊す『魔王』としての俺が。偽善によって人を救い、独善によって人を殺す。そうやってこの3年間生きてきた。きっとこれからも変わらないだろうし、変えるつもりも無い。

そう思っていたのに、あいつらがそれを変えやがった。

これはありふれた英雄譚などではない。

運命と呼ばれる鎖によって狂わされた1人の魔王の物語。

それゆえにこの物語は何処かおかしく、それでいてひどく普通な物語である。

さあ、始めよう。楽しく悲しい3部作の一つ目を……

魔法少女リリカルなのは〜魔を統べし者〜始まります。

プロローグ（後書き）

どうでしたか？ だいたいこれくらいの長さでやっていきます。

ご意見ご感想お待ちしております。

第一話 始まりは酷く優しい目覚めから（前書き）

連続投稿です。やっぱり一気に読めたほうがいいですね。

では続きです。

第一話 始まりは酷く優しい目覚めから

意識がゆつくりと浮上していく感覚。ああ、あの日の地獄が終わるのか。そんなことを思いながらゆつくりと目を開ける。するとそこには、

とびきりの美少女の表情のない顔が目の前にあった。

「……何をしてんだ？ イカロス」

「……いえ、マスターがうなされているようでしたので」

「……………そうか」

「……はい」

彼女はイカロス。通称、戦略エンジニアイド・タイプ『イカロス』俺の4人いる従者の内の1人である。桜色の髪を後ろで2つに結んでいて、スタイルも抜群。何を考えているのかわからない無表情と天使のような薄いピンクの翼が特徴的な『超』が付くほどの美少女である。まあ、「綺麗な花には」的な言葉通りの戦闘能力を有してはいるのだが……

「とりあえず顔が近い理由はわかった。ただどれいゝとこの体勢はまずいから離れてくれないか？」

「……はい。マスター」

「……………」

「……」

「……えと、イ」

「ああー！ー！ 何やってんのよ！ ！」

「はあ……」

突然響き渡る聞きなれた声。

「何もなかったから落ち着け、ニンフ」

「レンは黙ってて！ー！」

「……はい」

先ほど大声をあげたのはニンフ。通称、電子戦用エンジニアロイド・タイプ『ニンフ』。俺の2人目の従者である。空色の髪をツインテールにしたイカロスとは対象的な容姿をした。勝気な瞳と妖精のような綺麗な羽が特徴のこれまた『超』が付いてもおかしくない美少女だ。

「いったい何やってんのよー！ あんた、朝ご飯ができたから呼びに行ったはずでしょ！ どうやってたらあんな体勢になんのよ！」

「……マスターがうなされてたから」

「だったら起こせばいいでしょー！」

「……睡眠の邪魔をしたら駄目かと思って」

「だとしてもあんな体勢になる必要はないでしょうが!!」

イカロスの行動に真っ先に突っかかっていくため、こんなことはわりとよくあることなのだ。押し問答を繰り返している彼女たちに関わっていれば正直時間がいくらあっても足りない。ここは放って置こう。そう判断してさっさとリビングへと向かう。

「あ、おはよー。マスター」

「おはようございます。ますたー」

階段を下りてリビングへの扉を開けると2人分の挨拶が聞こえてくる。

「うん。おはよう。アストレア、カオス」

先に挨拶をしてきたのはアストレア。長い金髪とイカロスにも劣らないスタイルをした彼女は通称、局地戦用エンジェロイド・タイプ『アストレア』。感情豊かでみんなのムードメーカー的な存在である。これまた『超』美少女。

「マスター、マスター！ 私、掛け算ができるようになった!!」

頭がちよつと残念なことが玉にキズ。すごいでしょ、と笑いかけてくる彼女にさすがアストレアだね、などとあいまいに答えつつ最後の1人に視線をやる。

「クスクス、そのくらい簡単だよ」

得意げに掛け算を始めたアストレアを見ながら笑っている少女。
いや、幼女。彼女はオメガ。彼女は『第2世代』と呼ばれるエンジ
エロイドで、先ほどまでに上げた3人とは少々違う。髪はアストレ
アと同じく金。舌つ足らずなしゃべり方と俺以外の人間には毒舌な
ことが特徴である。

そうやって3人で楽しく会話をしていると階段を下りてくる音が
聞こえてくる。そのまま、乱暴に扉が開かれる。

「あーもー、少しは私の言うことも聞きなさいよ」

「……聞いている」

「1回で聞きなさいって言ってるの」

もう10分はたっているのにいまだにわいわいやっている。イカ
ロスとニンフは飽きないのだろうか。

「2人ともそろそろやめてご飯にしよう」

というより空腹を我慢できないだけなんだが。それは2人もなか
かおとなしく従ってくれている。そのままさつさと準備を終わらせ
て全員が席に着く。

「そんじゃ、いただきます」

「……いただきます」「……」

これが俺、『特S級広域次元犯罪者』レングラント・アイン

ツベルンの二〇一一年での一日の始まり。

第一話 始まりは酷く優しい目覚めから（後書き）

それのおとしものはマイナーだったでしょうか？

まあ、自己満足の部分があるので見逃してください。

7 / 12、修正・加筆

今日はもうひとつくらい投稿するつもりです。

第二話 白き少女と黒き少女（前書き）

第二話です。

やっぱり実際に書くのは難しいですね。

それではどうぞ

第二話 白き少女と黒き少女

そんなこんなで朝食を終え、5人でゆったりとした時間を過ごす。ああ、やっぱり平和はいい。そんなことを思っているとニンフがそういうえばと話しかけてくる。

「最近、このあたりで魔法が頻繁に使われているみたい。それも強力なヤツが」

「へえ、俺は気付かなかったけど……いつ頃から？」

この家には一種の結界が張ってある。この結界は中での魔法の発動などを完璧に隠すことができるすぐれもの。ただ欠点があつて外で行われた魔法なども感知し辛くなるのだ。まあ、完璧など存在しないということが証明だろうか。

「まあ、しかたないわよ。私がなんとか感知した程度なんだから」

ニンフは電子戦用と呼ばれているのは戦闘能力が低いかわりに後方支援に特化しており、探知などが脅威的に優れているからにほかならない。そんな彼女だからこそこの結界内でも外の様子を知ることができなのだ。

「そっか、ご苦労様。」

やさしく頭を撫でながら労わりの言葉をかける。

「ふ、ふん！ 私にかかればこの程度楽勝よ！―」

顔を赤らめながら答えるニンフ。この時の彼女は本当にかわいらしい。いつもこんな顔をしていればいいのに……

「なら次に反応があつたとき様子を見に行ってみようか」

そう4人に言つたそのままみんなでまったりとくつろぎ始めた。

その日の夕方、イカロスとカオスをつれて夕食の買い出しをしていた。もちろん、イカロスの翼は隠してある。

「今日はなんにしようか？」

「……マスターが食べたいものがいいです」

「カレーが食べたい！」

そんな会話を続けつつ3人でゆっくりと歩いていく。というか、イカロスにはもう少し自分の意見というものを持っていて欲しい。するとその時ニンフから念話が届く。

《レン、今朝言っていた反応がまたあつたわよ》

《そか、わかった。少し様子を見てくるよ》

《……気を付けなさいよ》

《わかってる。見に行くだけだよ》

少し不安げなニンフの声を聞きながらイカロスたちの方へと体の向きを変える。

「イカロス、カオス。例の反応があつた。イカロスは俺と、カオスは荷物を持って帰ってくれ」

「ええ、わたしも行きたい!!」

不満げな声を挙げるカオスを無視してそのまま人気の無い場所へと向かう。

「行くぞ、イカロス。カオス、おみあげ買って帰るから我慢してくれ」

「……はい、マスター」

「はい。……絶対だよ!」

「うん。約束する」

そう言つて俺のデバイス。ストレージデバイスの『フェンリル』を構えるとバリアジャケットを展開する。その間にイカロスは無言で翼を広げる。

「いつてきます」

「……いつてきます」

イカロスの翼が羽ばたく音とカオスの行つてらっしや〜いという声を聴きながら空へと飛び立つ。もちろん我が家に展開してある応用の認識障害の魔法を俺たちに付与しておいてよほどの存在でなければ俺たちには気付けないようにしてからだが。

「いつたいなんなんだろうな」

「……なんであろうと関係ありません。マスターの害になりそうなら排除するだけです」

「そか、ありがと。イカロス」

「……いえ」

謎の反応に思いを馳せつつ空をかける。 はあ、何の害も無ければいいけど……

そして到着した俺とイカロスの目に飛び込んできたのは、
1匹の巨大な猫に魔法を叩き込んでいる黒い少女とそれを呆然と眺める白い少女だった。

あゝ、……………なんだこれ？

第二話 白き少女と黒き少女（後書き）

あとがきです。

何とか書き上げることができました。皆さんに楽しんでいただけているのならいいんですが……

よくよく考えたらニンフはマスターなんて言いそうにない気がしてきたので修正しました。

7 / 12、修正・加筆。

はあ、これが難産か

第三話 それぞれの思い（前書き）

更新遅れてすいません。

インターネットに繋がなくて……

それはさておき第四話お楽しみください。

第三話 それぞれの思い

Side・高町なのは

私、高町なのは。現在小学3年生。ついこの間まで普通の女の子だったんだけどユーノ君に出会ってから私は私、魔法少女やってます。今日は、すずかちゃんのお家にお呼ばれされました。そしたら、偶然すぐ近くでジュエルシードの反応があつたから急いでやってきたんだけど……

「にゃあ~~~~」

「なんなのかな？ あれ……、おつきな猫さん？」

「なのは。多分あれは子猫の早く大きくなりたいていう願いが正しく叶えられたんだと思う」

……あれって、正しいのかな？

「まあ、いいや。封印しちゃうね」

「うん。周りに迷惑になる前にやっちゃおう」

そんな会話をユーノ君として、バリアジャケットを展開する。

「レイジングハート、set up!!」

「stand by ready, set up」

これって一度裸になっちゃうからいやなんだけど、そんなこと言
ってられないよね。がまんがまんだよ。

「リリカルマジカル、ジュエルシールド封」

「バルディッシュ。フォトンランサー連撃」

「Photon lancer, full auto fir
e」

そんな声と同時に光の雨が猫さんに向かって降り注いだ。

Side・フェイト・テストロツサ

初めまして。フェイト・テストロツサです。わたしはジュエルシ
ールドを探していました。ふと、その気配を感じたのでそこに向かっ
てみるととても大きな猫さんがいました。おそらくジュエルシールド
を取り込んでしまったのでしょうか。かわいいですが、心を鬼にして
やりましょうか。

「バルディッシュ。フォトンランサー連撃」

「Photon lancer, full auto fir
e」

「ふにやつ!?!」

フォトンランサーはそのまま猫へと直撃していきましたが、まだ反応は消えていません。わりと頑丈なようです。……面倒ですが、『彼』のためです。次で終わりにしましょう。そういえば、視界の隅に白い服の魔導師らしき少女が見えたような気がしますが無視しましょう。

「sealing mode , get set」

「捕獲」

巨大な雷が猫さんへと向かっていきそのままジュエルシードをはじき出す。

「ギニヤアアアアアア！」

猫さんはとても苦しそうな悲鳴を上げています。………わりと気持ちいいと思うんだけどなあ、これ。……まあ、いいです。

「封印」

「yes sir」

バルディッシュが短く答えると上空に雷雲が生まれ、そのまま雷が落ちてくる。そしてそれはジュエルシードを封印し、猫さんをもとに戻していきました。わたしは封印されたジュエルシードにバルディッシュをかざします。

「capture」

ジュエルシードがバルディッシュの中へ収納される。そのまま飛び去ろうとすると先ほどの魔導師らしき少女が話しかけてきます。

「ね、ねえ。そのあなたは」

なんだかとても馴れ馴れしいです。イラッ　と来たので一言言つてやっちゃいましょう。

「子供は家でママのおっぱいでも吸ってなさい」

この間、『彼』といっしょに見た映画で主人公が言っていたセリフを使ってみました。口を半開きにして固まっている少女を鼻で笑いさっさとこの場を去る。

ああ、『彼』は褒めてくれるだろうか。

そんなことを思いながら……

S i d e ・ レングラント・アインツベルン

「プ、ププ。プハハハハハ！！　見てたか、イカロス！？　まさかあいつがあんなこと言うなんて思ってもいなかったよ！！」

フェイトがまさかあんなセリフを言うだけでここまで笑えるなんていいこと知ったな。なんてこと思いながら爆笑しているとイカロスが話しかけてきた。

「……マスター」

「ククク。ん？ どうしたイカロス」

「いえ、いまの発言はひと月ほど前に彼女と見た映画の中にまったく同じものがありました」

「……………あれ。もしかして俺のせい？」

だとしたらヤバイ。ただでさえ彼女の母親であるプレシアよりも懷かれているからって理由でプレシア本人からあまりいい顔をされていないのにあんな言葉を教えて、あまつさえそれをフェイト本人が使ったと知られたら……。殺されるんじゃないだろうか。

「イカロス。どうしよう？」

「……………すみません、マスター。私にはどうしたらいいかわかりません」

うん。だろうと思ったけどさ。…………よし！ 忘れよう！！ 俺はナニモシリマセン。

「イカロス。フェイトをウチに連れてきて」

「…………マスターはどうするんですか？」

「俺は先に帰って夕食の用意をしてるから」

「…………わかりました。いってきます。マスター」

飛び立っていくイカロスを見送って家へと向かう。全力で料理することを強く決意して……

第三話 それぞれの思い（後書き）

どうでしたか？

自信ないです。アドバイスがもらえたらうれしいです。

第四話 黒き少女の全て（前書き）

皆さん、お久しぶりです。

最近なかなか時間が作れなかったですけど頑張りますので応援をお願いします。

第四話 黒き少女の全て

あれから約二時間が過ぎた。現在、あの時に見たものは全て忘却の彼方へと追いやりキッチンで料理に全力を注いでいる。もうそろそろイカロスがフェイト達を連れてくるだろう。あいつらと会うのはひと月ぶりだな……。

「……ただいま戻りました」

「イカロス。お願いだからいつの間にか背後に立たないでくれ」

なんなんだろう。こいつは俺を驚かすのに命でも賭けているのだろうか。

「久しぶり。レン」

「ああ、久しぶりだな。フェイト」

「ひっさしぶりだね！ レン！」

「おう、アルフもひさしぶッ！」

オレンジ色の髪をした女性、彼女の使い魔であるアルフにも挨拶をしようとしたのに途中で抱きしめられて遮られた。……まあ、役得だからいいけれどさ。

「んゝ、相変わらずいい匂いがするんだねゝ」

アルフはこう言つてよく俺を抱きしめる。いつもならいいけど今は駄目だ。せつかくの再会なんだからこのままでは駄目だ。けど、……もう少しだけ。

「あんたは何やってんのよ！ いい加減にきなさい！」

ニンフの怒鳴り声でふと我に返る。そのままアルフを引きはがす。

「あう、ちよつとくらいいいじゃないか」

「駄目に決まってんでしょ！ あんたは自分のマスターに抱きついてなさい！」

「だってフェイトよりレンの方がいい匂いがするんだからしかないじゃないか！」

ぎゃいぎゃい言い合つて二人は放置して、と。

「飯の用意はできてるぞ」

「うん。レンのご飯、楽しみだよ」

「……みんなを呼んできます」

フェイトとイカロスを連れてリビングへと向かう。おっと、その前に……

「おかえり、フェイト」

「うん、ただいま」

恒例行事をやったら心底うれしそうにフェイトは返事をしてくれた。

「そうだ。ねえ、レン」

イカロスが皆を呼びに行っていて、アルフとニンフはキッチンでケンカ中。ふと何かを思い出したかのようなフェイトが話しかてきた。

「なんだ？」

「さっきの戦い見てたでしょ」

な、なんで？ 気付いてたのか！？ 気配は消してたはず！！

「なんでって顔してる。私が気付かないわけないよ。レンが１キロ以内にいれば匂いでわかるから」

……………はい？ ……匂いだって？

「で、どうだった？」

「あ、あーっと。あのセリフはまずいんじゃないか？」

「そうかな？ いいと思ったんだけど……………」

「プレシアに怒られると思うぞ」

「あれはどうでもいいけどね」

プレシアは《あれ》扱いかよ……。

「もしかして、おしおきかな？」

表情こそ変わらないがキラキラとした瞳で見つめてくるフェイト。

「……変わってないな。」

そのマゾ思考は。

「当たり前だよ」

そうなのだ。いつからかフェイトは痛いの大好きなマゾっ娘になつてしまったのだ。あの時のプレシアの困惑ぶりは目も当てられなかった。

「私にとってあなたが全て。あなたのためならどんなことでもするし、あなたがすること全てを受け入れる。普通じゃあなたを受け入れきれないと思ったから私は変態いじょうになっただけだよ」

さも当然といった風に続けたフェイト。……ああ、愛が重いなあ。

「大好きだよ。レン」

「……そりゃどうも」

第四話 黒き少女の全て（後書き）

フェイトの異常性をアピールしてみました。

どうですかね？ フェイトは捧げるタイプだと思ったのでこんな風にしてみました。

感想など他のキャラはどんな変態がいましたらどんな意見をください。ノワールでした。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5046m/>

魔法少女リリカルなのは～闇を統べし者～

2011年1月7日00時46分発行